「今日の説教、聴き手のために」　2008/11/23　明治学院教会(133)
（このプリントは毎週作っているものです）　岩井健作

「慈しむ神の許で」　収穫感謝日（謝恩日）

ルツ記２章１節－２３節　（ボアズの畑で落ち穂を拾うルツの物語から）

1、高層住宅が建ち並ぶ都市生活には「秋祭り」の感覚がない。しかし、どの民族にも、秋には、収穫を神に感謝するお祭りがある。アメリカで始ったThanksgiving Dayは１１月第四日曜日に守られ、その習慣は日本のプロテスタント教会に伝わった。聖書の民族は秋には「仮庵の祭り」、春には「刈り入れ祭り」を祝った。

2、フランスの画家ジャン＝フランソワ・ミレーは「落ち穂拾い」を描いた。旧約聖書の故事を意識していたに違いない。古代イスラエルの法律に従って、麦の刈り入れ時、畑の持ち主は、落ち穂を拾い集めなかった。落ち穂は、寄留者・孤児・寡婦が、拾う権利を認められていた。（レビ記19:9-10 、申命記24:19-22）。

3、「ルツ」は、ルツ記に出てくる女性の名。異邦人で、寡婦であった。社会的には蔑まれ、貧しい立場の人であった。しかし、聖書はこの人の名をことさらに記憶している。新約聖書のマタイ福音書のイエス・キリストの系図に「ボアズはルツによってオベドをもうけ」と出て来る（マタイ1:1-16）。

4、ルツ記の物語は四幕ものの劇を思わせる。第一幕。飢饉でユダヤのベツレヘム在住の男エリメレクがモアブに移り住んだ。彼も二人の息子もその地で死んだ。残った妻ナオミは、息子たちの異邦人の妻たちに「自分達の里」に帰り再婚を促す。しかし、嫁の一人ルツは自分の将来の可能性よりも悲惨な寡婦となった義母と運命を共にする決意を固し、姑の苦難に同伴する。第二幕。ベツレヘムには、ナオミの亡き夫の有力な親戚ボアズがいて「ゴーエール（家を絶やさないように責任を果たす親族の意（レビ記25:23 ）」の責任から、この寡婦とその嫁の「落ち穂拾い」を手厚く守る。第三幕。ナオミはボアズへの接近を試み、ルツは大胆に求婚する。思慮深いボアズは「町の門（公の証人）」の法的な手続き経て、レヴィラート婚（創世記38章、申命記25:5-10)の精神をいかし、ルツと結婚するという物語である。洋画家、小磯良平は聖書の挿絵に、落ち穂拾いのルツと、地主のボアズの出会いを描いた。美しい絵である。

5、「落ち穂拾い」には幾つかの現代的テーマが含まれている。「寡婦」の社会的地位とそれを支える社会法というテーマ。今、現代はそのような社会的連帯の法体系が崩れつつある。弱者が「競争原理」の「新自由主義」に丸投げされている。異邦人の疎外は如何に克服されるべきか。多民族共生の課題である。古代も現代も厳しい。だが、この書物には通低音のように「主の慈しみ」（ヘッセド［愛、慈しみ、真実、純情、憐れみ、恵み、などと訳されている旧約の基礎語句］）が語られる。「あなたたちは死んだ息子にも私にもよく尽くしてくれた。主がそれに報い、あなた方に慈しみを垂れてくださいますように」（1:8)、「生きている人にも死んだ人にも慈しみを惜しまれない主が、その人（ボアズ）を祝福してくださるように」(2:20)というナオミの祈りが、現実の暗さと厳しさを包んでいる。歴史をそのどん底で、慈しみで支える神への信頼が悲嘆の女性の歩みを確かなものとした。主の「慈しみ」を生きることが、歴史を生きることであるのだ。悲しい出来事はたくさんある。しかし、主の慈しみを信じて、聖書の人々の後に続きたい。